

暮しの5K問題

国士館大学 矢島謹一

最近はあまり聞かないが、昔は「家は1代、着物は2代、食いものは3代かかる」ということがいわれていた。よい家に住むのには1代の富で達成されるが、よい着物を着ることは、すなわち今時の言葉でいえばベスト・ドレッサーといわれるようになるのには少なくとも2代の富がつかないと達成できないということである。さらに、よい食生活ができるようになるためには3代以上の富がつかなくては駄目であるというのである。

衣食住は暮しの最も基本的な条件である。その基本条件が、これほどやっかいなものであってはとて私ごときものの係りがもてる領域のものではない。しかし、私にも暮しはある。自分の家に住み、暑さ寒さに合わせる衣類もある。健康を保つ食事もしている。すべて私なりに、わが家なりにやっている。良い悪いというものの見方がその基準の置き方がちがっているからであろうが、結構満足し、最適であると思っている。こんなことをいうと、いかにも夢がなく、望みが小さいと思われるだろう。

暮しの問題は、自分自身でやるか、プロの援助を多く受けるかで、その内容が大きく変わる。住宅というものは、ケチな家でもプロに依存するところが大きい。それだけに昔から立派なプロが存在し、戦前から建築学科というものが大学に設けられていた。それに比べると着物は、当時はせいぜい専門学校どまりであり、食物となると専門学校もなかったように思う。よい学校がないということはそれだけ家庭の力に負うところが大きいと

いうことである。したがって家の力が大きくないと達成できないということなのであろう。

しかし戦後は様子が大きく変わった。衣類に関する教育・研究を行なう大学ができ、食物に関する教育・研究を行なう大学が誕生している。そしてその道のプロが大量に産まれている。しかし、その割には、あまり変りばえはしていないようにも思える。それは今の大学は昔の専門学校ほどにもっていないという説があるくらいであるから、そういうことになるのかもしれない。

先日、最近の大学卒業の新鋭の技術者が設計監督をした住宅をみた。たしかに斬新であった。建築の専門誌のいくつかに写真入りで紹介されている。しかし、依頼主は住みにくくて困っている。住宅というものは住みよくなっては、いかに斬新なデザインであっても困るのである。住みよいということの基本は、十分に太陽の光を取り入れることであり、できるだけ自然の風通しをよくすることである。これが健康にも、経済的にもよいことであり、住みよいということになるのである。

ところが、この住宅は、その配慮がまったく欠けているのである。電熱器とクーラーですべてをカバーしようという設計である。東京の下町でなら、そういうことがあるかもしれないが、世田谷あたりでは、場所にもよるが、まだまだそんな極端なことをしないでよいのである。これが最近のプロのやる仕事であり、こういうプロが多くなってきているのである。これではプロに頼めばうまくいくという時代ではなくなってきて、ORの必要性が出てきたと考えてよいのであろうか。しかし、ORはもともとすぐれたプロの存在が前提であるということを考えるとORの前途が暗くなってきたような気もするのである。

わが家の暮らしの中で、よく夫婦喧嘩のたねになるのは夕食のおかずの問題である。家内は「今夜

のおかずは何にしますか」とよく聞く。子供たちと相談した結果、とんかつとさしみということになった。しかし、夕食の膳にのったものは、あじの塩焼きと肉じゃがである。いったいどういうことだと怒るのも止むをえないことと思う。

実のところ、夕食のおかずを何にするか聞かれるだけでも迷惑である。飯のおかずなどというのは食事のときまで知らないほうが楽しみは大きいのである。どうせ、またかというものが出てくるのであるから、知らないほうが無難というものなのである。それなのに、わざわざ聞いて、期待をもたせておきながら、違ったものが出てくるというのは、いったいどういうつもりかということになるのである。

家内にいわせると、とんかつやさしみは、いつでもできるし、1年中味に変わりはないものである。しかし、あじの塩焼きとなると旬があり、いつでもよいわけではない。たまたま今日は魚屋にいいのがあったからだという。また、肉屋が牛肉の特売をしていて安かったら肉じゃがにした、というのである。牛肉は平素は高いからなかなか買えないが、今日は安かったからそうしたというわけである。

いわれてみれば、それが最適解というものかもしれない。問題は夕食のおかずの決定権の問題である。私は何にするかと聞かれたので、私に決定権があると思った。しかし、実権は家内にあり、この問題の決定権者は家内だったのである。私はしがない下請のORワーカーにすぎなかったのである。したがって、怒れるような立場にはなかったのである。ORワーカーというものは、よく立場をわきまえて身を処することが必要なのである。ほんとうにORワーカーというものの立場は楽ではない。

暮しの問題も、最近はだんだんとかかわる範囲が広がってきた。民主国家ということになったためであろうか。子供の教育の問題、医療の問題、通勤やレジャーなどの交通・運輸の問題、さらには

物価の問題と、考えれば考えるほどいろいろな問題がある。このように挙げてみると、今日の政治上の大問題である3Kの問題も含まれている。米、国鉄、健康保険の問題が含まれている。それだけではない、教育の問題、国会の問題を含めると5Kとなる。しかも、このなかで一番重要なのは国会の問題である。すなわち国会が正しく機能すればすべての暮しの問題が解決できるということになるのであろう。暮しのORの根本は国会の問題ということになるのではないだろうか。

OR学会では、今日までこういう問題は避けるようにしてきたように思う。今日、暮しのORということが話題にのぼったということであるから夫婦喧嘩の仲裁的な、つつましいORもよいが、もっと多くの人に喜ばれる方向に眼を向けることが必要なのではないだろうか。

先日、親戚の子が付属の高校から大学へ推薦で入学することが決定したという報告を受けた。「よかったね」ということで、何学部に入学が決まったのかを聞いたら「さあー」ということで、母親は知らないのである。世のなかは、一方ではいろいろと面倒な問題がある。また一方ではまったく呑気で、問題は何もないのである。こういう世のなかであるから、面倒な問題に顔をそむけていると、問題などなくなってしまうのである。仕方がないから、コンピュータにたわむれたり、数式をもてあそぶということになるのだろうか。

× × ×

× × ×